第１　劉茜懿さんとの出会い（『がんばったで！４５年』４６５頁掲載）

３．坂和章平とすばらしき人たち～交遊録（１８）
北京電影学院卒の才女・劉 茜（リュー・チェンイー） 懿 さん
（事務所だより第２４号　１５年新年号）

◆私が北京電影学院で「坂和的中国電影論」と題する２時間の特別講義を行ったのは０８年１０月１０日のこと。それを世話してくれたのは、日本側は古澤敏文氏（事務所だより第９号で紹介）で、中国側は美術学部の王鴻海教授と劉旭光教授。日本留学の経験もある劉教授は日本語もペラペラだった。日本人留学生の安藤直子さんを含めた約６０名の受講生の熱気はすばらしいものだった。

事務所４Ｆの大会議室で（2014年7月30日）

◆それから６年。北京電影学院を卒業し、早稲田大学に留学中の劉教授の娘である劉茜懿さんからの連絡により、１４年７月３０日、劉教授、刘晓清北京電影学院副教授、霍廷霄北京電影学院教授（張芸謀監督の映画で美術デザインを担当）たちが、私の事務所と自宅を訪問してくれた。

自宅マンションで（2014年7月30日）

◆机の上に並ぶ、『シネマルーム』１～３２を中心とした書籍と、神戸国際大学の毛丹青教授を軸とした私の日中交流活動を話題に、事務所での公式対談は有意義なものに。そして、会場を自宅マンションに移しての夕食会。ここでは大いに飲みかつ食べながら、３人の教授たちが北京電影学院聯合作業卒業制作プロジェクト坂和章平賞の設置を提案。直ちに具体化する方向に決定した。さらに、スマホの伴奏で１人が歌い始めると、全員でそのまま近所のなじみのお店「茶良多」へ直行。夜が更けるまで、映画と美術そしてカラオケを通じた日中友好が実現した。

２人のツーショット（2014年11月3日）

◆更にその１ヶ月後の９月６日、今度は私のセットによって、東京での劉茜懿、古澤、安藤の再会を実現。そこには、中国人の友人たちが次々と集まり、盛大な情報交換会になった。その席で、劉茜懿から初監督作品『鑑真に尋ねよ』の製作発表が行われる中、私は直ちに５００万円の出資を発表した。「四小名旦（中国四大美女）」の一人で、北京電影学院卒の趙薇が、大学院の卒業製作作品として初監督した『Ｓｏ　Ｙｏｕｎｇ～過ぎ去りし青春に捧ぐ～（致我們終将逝去的青春）』は第２２回上海映画批評家大賞の最優秀新人監督賞等を受賞し、日本でも好評だった。『鑑真に尋ねよ』の公開は１６年５月の予定だが、その成功を期待したい。